

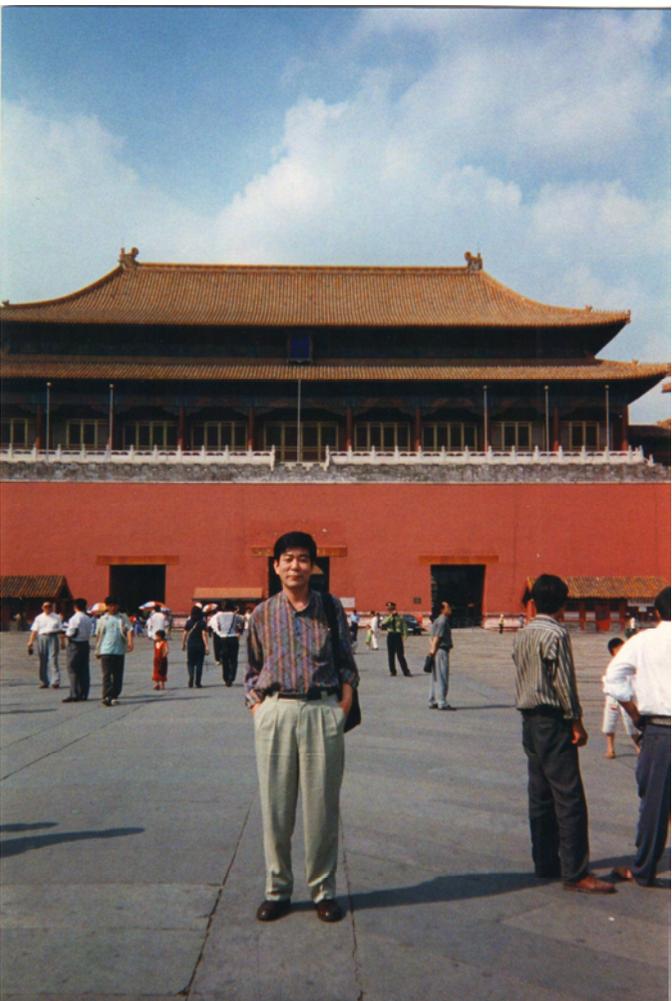
## 北京の夕焼け小焼け

「メニューにないけど、銀鱈ぎんだらが美味しいよ」

「よし、それにした。それとお酒をもう一本」

野菜の炊き合わせ、若芽とキュウリの酢の物、それとカツ丼を酒の肴さかなに、すでに一本を空にして、ほろ酔い加減だった。それでも頭だけ妙にが冴さえていて、無性むしように自分自身を酔わせたかった。

どう見ても日本人としか思えない和服姿の小柄な女性の笑顔に惹かれて入った北京のホテルの日本料理屋でのことである。耳慣れない抑揚の「イラシヤマセ！」という「イ」が一つ足りない言葉で、やっぱり日本じゃないと思いきらされたものの、吸い込まれるように暖簾のれんをくぐっていた。



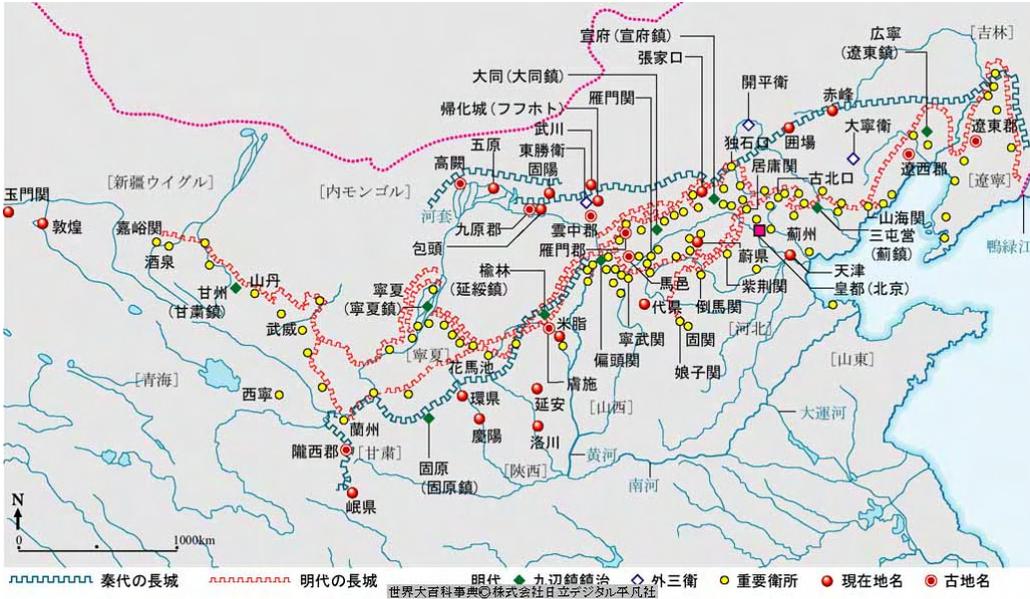
それもこれでもドツと疲れを感じていたからだ。上海で打ち合わせを行い、工場見学をしたあと、北京に飛んで休日を利用し、

万里長城や紫禁城（故宮博物館）に行った日の夜のことだ。上海料理、広東料理、そして四川料理と連日連夜の中華料理にさすがに参った。持って来たインスタントの若芽の味噌汁がやけに美味いと感じるようになっていた。

# 万里長城を始め驚きの連続だった

振り返ると、この二日あまりの間に、実にいろいろ体験した。万里長城には圧倒された。北方騎馬民族に対する防御のために築かれた長大な城壁。現存するものは主として明代に築造されたもの。中国の北辺を西に向かって走る総延長約三千キロメートルの人類史上最大の建造物。長城の外面は焼いて作った煉瓦、内部は突き固めた粘土。高さは約十メートル、上部で人馬がすれ違うことができる幅で、ところどころに見張り台がある。起源は紀元前二世紀、中国を統一した秦の始皇帝に遡る

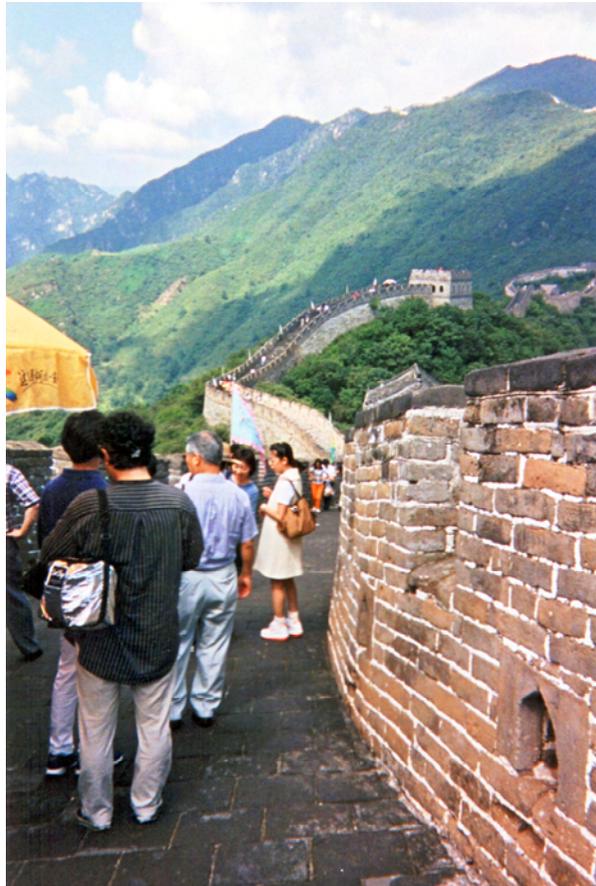
——その正否は別にして、その程度の知識は持っていた。



だが、こうした知識は実物を目の前にすると、まったく無力だった。万里長城を見せられると、それだけで中国には敵わないと参ってしまう人が多いと聞いていたけれど、僕もそうだった。



現代的な言い方をすれば、とてもコスト・パフォーマンスは合わないと思うし、少なくとも僕の知っている中国の歴史で、これが大きな効果を発揮したとは思わない。



それだけに、こういうものを造らせ、造る人たちのエネルギーの凄さというか恐ろしさを想像し、降参してしまった。紫禁城を見ても、天安門を見て同じような思いを抱いた。

アンコール・ワットなどを始めて見たときにも、同じような思いを持ったけれど、その比ではなかった。見ていると、だんだん恐ろしくなってきた。そして、多分、そう感じさせることが狙いだったろうと確信した。

同時に「民度」——ある地域に住む人々の生活水準や文化水準の程度（大辞林）——という言葉の意味を改めて考えさせられた。多分、「民度」が高ければ、こうしたものは出来なかったに違いない。だが、その場合の「民度」は、あくまでも欧米の価値基準に従ったもので、普遍的だとは思えない。

価値基準が違えば、いわゆるコスト・パフォーマンスの評価も変わる。その違いが分からなかったことが、アメリカがベトナム戦争で勝てなかった大きな理由だろうという思いを強く持った。



泥沼にはまり込み、ついには核兵器使用の誘惑に魅せられるような危険な状態に陥ってしまうのではないだろうか。

戦前の日本にも似たような雰囲気支配していた時期があった。それがアメリカの原爆投下を促す一つの要因にもなったのだろう。しかし、振り返ると、そんな雰囲気は日本を支配したのは、ほんの一瞬のことだった。歴史上、後にも先にもない。だから鬼畜米英、一億総玉砕と叫びながらも、敗戦と決まった瞬間、驚くほどスムーズに武装解除が行われ、レジスタンスとか内戦とか呼べるものはほとんど起こらなかった。この点では欧州とも異なる。

息を切りながら登った万里長城の上から、その延々と続く光景を眺めていたら、ともかくいろいろな思いが次から次へと湧き上がってきた。そして、やはり日本の文化の根底には、長らく師と仰いできた中国とも、文明開化以来、懸命に追いかけてきている欧米とも違うものが流れているという思いを強くした。

さらに、いまアメリカがイラン・イラクに手を焼いているのも同じだろうとも思った。「ジハード（聖戦）」ということで徹底抗戦し、喜んで死んでいく。だからコスト・パフォーマンスを前提とする物量作戦でダメツジを与えても期待する効果が得られず、

## 絶品だった雲南省の「過橋麪」

同時に、考えてみれば当たり前のことだけれど、一口に中国と言っても場所によって何もかもまったく違い、アメリカと同じだと痛感した。数日前にいた上海とは、言葉にも、全体として醸し出す雰囲気にも共通点を見出すことは難しかった。

余談だけれど、暇を見つけ、以前、上海から高速道路で蘇州の「寒山寺」に行つたことがある。

月落烏啼霜满天 霜天に満つ

江楓漁火对愁眠 愁眠に対す

姑苏城外寒山寺 姑苏城外の寒山寺

夜半鐘声到客船 客船に到る

月が沈み、烏が啼いて、霜の気が天に満ちわたる。

岸の楓と漁火が、うつらうつらとする旅愁の目に映る。

そこへ、蘇州郊外の寒山寺から、

夜半を告げる鐘の音が、わが乗る小舟にも聞こえてきた。

僕が高校時代に漢文の授業で覚えた有名な唐中頃の張継の「楓橋夜泊」だ。この舞台が「寒山寺」で、出来れば行きたいと思っていた。それで、一緒に渋る寅さんを口説き落とし、初めて上海に来た時に、寸暇を惜しんで行った。実を言うと僕の頭は混乱していた。「寒山」という言葉が使われていた漢詩を、もう一つ覚えていた。同じ秋の詩、杜牧の「山行」という唐末期のものだ。

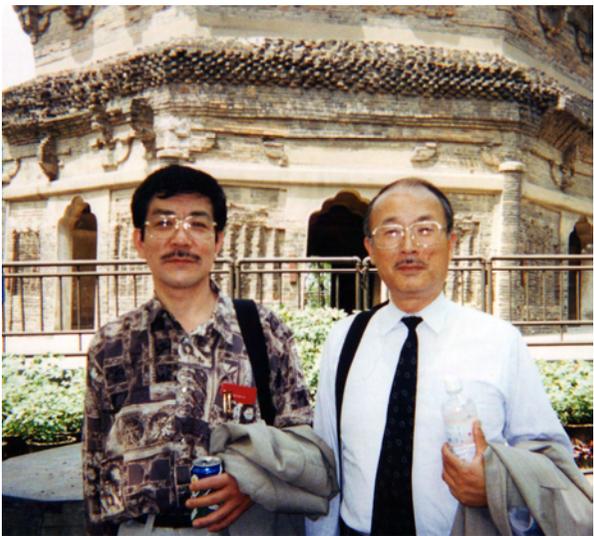
遠上寒山石径斜 遠く寒山に上れば 石径斜めなり

白雲生処有人家 白雲生ずる処 人家有り

停車坐愛楓林晚 車を停めて座に愛す 楓林の晩

霜葉紅於二月花 霜葉は二月の花よりも紅なり

遠く、もの寂しい山に登っていくと、石ころの多い小道が斜めに続いている。そして、そのはるか上の白雲が生じるあたりに、人家が見える。車を止めさせて、気の向くままに夕暮れの楓の林の景色を愛で眺めた。霜のために紅葉した楓かえでの葉は、春の二月頃に咲く花よりも赤かった。



この詩での「寒山かんざん」は固有名詞ではない。しかし、僕は、それを固有名詞の「寒山寺かんざんじ」と結びつけ、勝手に想像を膨らませていた。「楓かえで」という言葉が両方に使われているもので、恥ずかしながら、この歳になるまで、舞台は同じところと思っていた。つまり、簡単に言えば、水があつて、その近くに急峻きゅうしゅんな山があつて、その山の上に寺がある——そういった構図の場所を思い描いていた。



ところが、行ったら、まったく想像とは違っていた。たしかに水(湖)はあり、橋もあったけれど、「山」はない。あくまでも平坦な土地だった。それは地図で「蘇州そしゅう」の場所を見れば、直ちに了解できた。そして「……山」という名称は日本でもよく見かけ、一種の「屋号」のようなものだとして了解してはいたことなのだけれど、実際に「寒山寺」に着くまでは、そこまでは考えなかった。それで、「寒山寺」に着いたと言われ、周囲の風景を眺め、愕然がくぜんとした。

頭の中が一瞬、真っ白になった。浜名湖の湖畔の観光地のようだった。繊維産業の本拠地だと言う。たしかに密集する土産物屋のほとんどは繊維製品を扱うものだ

つたし、衣服などの通販で伸びている日本の「ニッセン」などの看板があらこち  
らで目に付いた。すべてが僕の誤解だったということに気が付いた。

そんな体験があるので、今回は、北京は初めてなので、頻繁に北京に行っている  
友人のMに「良いホテル」を紹介してもらった。しかし、値段感覚がずれているの  
か、僕には滅茶苦茶に値段が高く、とんでもないと感じた。だから北京駐在の知人  
のNさんに、美味しいものを食べさせてやると言われても疑心暗鬼だった。

ところが、Nさんに連れて行ってもらった店はたしかに美味かった。事務所近く  
のみすぼらしい店の餃子——これが、すべて蒸し餃子だけれど、ともかく美味しく  
て安かった。一人当たり約五百円で、いろいろな具の餃子とキャベツなどの漬け物  
をたらふく食べ、そしてビールも飲めた。友人の作家、杉田望の十八番が蒸し餃子  
で、何回か馳走になっただけけれど、比較にならない。そのNさんに「絶対だ！」とい  
うことで連れて行かれたのが、雲南省経営の会館の中の食堂だ。そこで雲南省には  
珍しいキノコ料理などいろいろあるけれど、まずこれを食べなくてはということ  
で食べさせられたのが「過橋麵」だった。



スープと麵と具とが別々に出てくる。スープは、  
鶏がら、豚骨などから煮出したやや白濁した薄塩の  
もので、その表面にはたつぷりと油が張っている。  
これが熱や蒸気の逃げるのを防いでいる。この中に  
具を入れる。まず薄切りの豚肉などを入れ、それか  
ら香菜、ネギ、椎茸などを入れる。表面にこつてり  
と油が張っているけれど、スープ、麵、それと程良  
く火の通った具とが絡みあい、歯ごたえも良い上に、  
意外にあつさりとしている。絶品だった。夢中にな

って食べている僕たちを見て、Nさんはおもむろに「過橋麵」の由来について話し  
始めた。この間合いの取り方が絶妙で、箸を止め、思わず聞き惚れた。

「昔、現在の雲南省の省都、昆明に科挙（中国、隋初から実施された高等官資格試験制度。こんめい かきよ）唐代では秀才・明経・進士などの六科からなり、科ごとに古典的教養・文才・政論などを試験した。宋代には進士科のみとなり、試験も解試・省試・殿試の三段階となり、明・清代は郷試・会試・殿試として行われ、過当な競争を生むなどの弊害を生じた。清末の一九〇五年廃止——大辞林）のために必至に勉強している男がいた」と切り出した。

「彼の部屋は母屋から川を隔て、橋を渡ったところにあつた。そのため食事を持つていつでも途中で冷めて不味くなり、残しがちだつた。息子の身を案じた母親は、そこで知恵を絞り、アツアツのスープの表面に油を張つて熱が逃げないようにし、それと麵と具とを別に盛り付けて運び、その場で、アツアツのスープに浸して食べるようにしたところ、大喜びして食べた」

そこから「過橋麵」と呼ばれるようになったという。そんな説明の後、「ね、美味いだろう」と駄目押しするように、ニツと笑つた。しかも、値段はと言えば、これまた五〇〇円もしなかつた。

## 北京ダックもクソ食らえ

Nさんがご馳走してくれた餃子と「過橋麵」は、あの得意げな顔を思い浮かべると悔しいくなるけれど、本当に美味しかった。それに比べると、Sさんの部下の中国人が紹介してくれた天安門近くの北京ダックの「総本家」と言われるところで食べた北京ダックも冴えなかつた。

決して美味くなかつたわけではない。だが、あまりにも量が多いし、何かが欠けている味だつた。頼んだ紹興酒が容器は立派だつたけれど、外れだつたのが、その思いに拍車をかけた。





そして、その思いが、ほとんど徹夜の状況で成田を立ってきたのがまずかったという思いにつながった。友人たちと寿司屋で一杯や

り、それから旅行の準備などをやっていたら四時を過ぎ、寝る間もなく、車を走らせ、そのまま成田から上海に飛んだ。このところ体調が良いもので、つい油断したのがいけなかった。

そのツケが回ってきた感じだった。体調を崩すと、いつものことだが、どうしても気持ちが沈みがちになってしまう。心の底に澱おりのように溜たまっている自分の体への不安が噴き出してくるのを止めることができなくなってしまう。

「一日、四回も注射を打つんですか」

「何でも食べられるのですか」

「それで体は大丈夫なんですか」

「悪くはならないんですか」

「普通の生活ができるんですか」

初めて僕の体のことを知った人は、ほとんど例外なく驚いて、そしてお気の毒に、大変ですね、といった雰囲気です、こんなことを聞いてくる。でも、何でも食べているし、海外にも足を伸ばすし、そんな生活を十年近くもやっていると、だんだん緊張感も薄れ、人が思うほど苦痛ではなくなっている。いろいろ聞かれても、気楽に「自己管理を怠らなければ大丈夫ですよ。普通の人と変わりませんよ」などと答えられるようになっていく。

それに、元気だった同じ年代の友人や知人たちが、このところ相次いで亡くなっている。僕に「体は大丈夫ですか」などと心配そうに聞いていた、一緒に仕事をやっていた意気軒昂で元気潑刺だった同年代の人は、ちよつと調子を崩したと言いつてから、二か月あまりで逝ってしまった。別の知人は、具合が変で病院に行つて検査したら、もう癌がかなり進行していて、とりあえず手術はしたが、余命は長くはないと宣告されたという。本当に人の寿命は分からない。初めから蠟燭の長さは決まっているのかもしれない。そして、ひよつとすると僕は普通の人よりも元気でやれるのかもしれない、蠟燭が長いのもしい——不遜にも、そんな思いを抱くこともあるようになっていく。

しかし、そんなちよつとした「自信」も、体調もそうだが、自分でも情けなくなるくらい些細なことで揺らいでしまう。少しは達観した心境になり、多少のことは動じなくなつてもよきそうなものだが、年を重ねるに連れて、逆にだんだん脆くなっているような気がする。

「嘘ばかりついて——」

「そんな体で夢見たいなことばかり言つて——」

「無理ばかりして——」

「馬鹿じゃないの——」

「意地ばかりはつて——」

「バカ」の連続だ。あざ笑いが、頭の中に響きわたる。暗雲が立ち込め、足下が音を立てて地滑りを起こす。やり場のない焦燥感と不安感と絶望感が大手を振つて闊歩し始める。そして、走馬灯のように、それでいて奇妙にハッキリと、子供のころの出来事が浮かんでくる。いつものパターンだ。

特大の鬼ヤンマを近くの原っぱで捕まえて得意になつたこと

プラタナスの大木によじ登つてミンミン蝉を捕まえたこと

家に届いた初めてのテレビに大きな歓声を上げたこと

ムシロ小屋でドサ回りの劇団が演ずる剣劇に熱中したこと

手製のカンテラを下げ、ドキドキしながら旧陸軍の掘った洞窟を探険したこと  
野外の布張りのスクリーンに映し出される西部劇に手に汗を握ったこと

鞆を放りだしてはよく釣りに出かけたこと、タナゴを百匹以上も釣ったこと

秋になると寺の境内の銀杏の木に登って実を揺り落としたこと

イナゴ取りの帰りに見上げた空の夕焼けが怖いくらい真つ赤で綺麗だったこと

みんなつい昨日の出来事のようなものである。ふつと、あの手放しの、何のわだかまりもない感激を、もう一度、味わいたいと思った。それがかなうのなら何もかも放り出したいという衝動に駆られた。

でも、それこそつとも贅沢な願いに違いない。それに、僕の場合は、何もかも投げ出すといつても、そもそも「命」すらも「そんな死にかけたもの」と一笑されるような危ういものなのだから。手を伸ばせば届いても良さそうなものなのに、蜃気楼しんきろうのように遠ざかっていく。僕の願うこと、それはいつも、そんなまぼろしのようなものなのかもしれない。

「ガチャン」という大きな音が響き渡って、いきなり現実に引き戻された。見上げると、和服姿の小柄なポチャとした丸顔の若い女店員が照れ臭そうに盆を拾い上げていた。入ったときは、お客は僕一人だけだったのに、もうテーブルの七割ぐらいはつまっていた。右斜め、三メートルほどの席には、ショートカットの若い美人が座っていた。グレーのワンピースに真珠のネックレスという清楚な装よそおいが、小さな顔と細めの体に良く似合う女だ。好奇心がわいた。観光客の雰囲気ではないし、一人ならまだしも側そばに二人もおやじが付いている。親子でも仕事の仲間でもなさそうだ。そんな詮索せんさくから始まって、テーブルの下に隠れて見えない彼女の足にまでイメージを膨らませた。

そこに和服姿の女店員が海苔茶漬けを彼女に運んできた。もう、アルコールは十分だということなのだろう。それを眺めながら、「そう、酔っぱらっちゃあダメだ。おにぎりをほう張るのもイメージを壊すし、天井やカツ丼も似合わない。やつぱり海苔茶漬けが似合っている」と、自分勝手に彼女を「指導」し、その調子、その調子と、一人で悦えつに入いっていた。

ところがである。彼女は、どうしたことか、レンゲで海苔茶漬けを食べだした。「オイ、オイ、待ってくれよ。いくらなんでもレンゲはないだろう。頼むから箸はしを使つかってよ」そう呟つぶやいたとたん、「ハンツーンヤン」そんなような音が彼女の口から聞こえた。日本人ではなかった。もちろん意味はさっぱり分からない。でも間違まちがいなく北京語らしい。そのくらいは僕にも分かるようになっていた。

「やつぱり北京だ」そう呟つぶやいて立ち上がった。足が少しふらついた。「アリガトゴザイマス」今度は「ウ」抜きの舌つ足らずの声に送られて店を出た。とたんに、どこからか夕焼小焼のメロディーが聞こえてきた。

思わず立ち止まって耳を澄すました。でも、ロビーから流れてくる懐なつかしのポップスと騒がしい北京語の会話にかき消されて二度と聞こえてこなかった。いくら耳を澄すましても聞こえてこなかった。あの時、どこからか分からないけれど、間違いなく「夕焼小焼で日が暮れて――」のメロディーが流れてきた。そういまでも僕は信じている。

一九九八年秋 伴 友貴